０２／０５／０５　礼拝メッセージ　　近藤修二　牧師

主題：神との契約
聖書箇所：マルコの福音書　14 章 22 節～26 節

愛する弟子たちと最後の過ぎ越しの食事をなさったイエス様。弟子たちはそのすばらしい祝福の中にいたわけです。この最後の時、私たちはイスカリオテ・ユダの裏切りの話だけに目をとめてしまいがちですが、彼だけではなく、ほかの弟子たちも同じようにイエス様を悲しませていたのです。この中の 1 人が私を裏切るとイエス様がお話になった時、弟子たちはそれが誰だろうと話を始めました。そしてそれだけではなく、自分たちの中で一番偉いのは誰かという話を始めるのです。その後、イエス様はペテロに対して、鶏が鳴くまでに三度私を知らないと言うとおっしゃいます。そして、ペテロは「ご一緒なら、牢であろうと、死であろうと覚悟はできております。あなたのためなら命を捨てます。」と言うのです（ルカ 22 章）が、結果はイエス様のおっしゃったとおりになります。

このような使徒たちやイスラエルの人間を見たら、人間とは何と自分勝手なものであるのかに気づかされます。しかし、イエス様はこのような人たちに対して、「あなた方こそ私のさまざまな試練の時にも私についてきてくれた人たちです。」とやさしい言葉をかけられ、この弟子たちが、イエス様がいなくなった後も、信仰の歩みを忠実に果たして行くために、大切な 4 つの秘訣をお話になります。この教えは当時の人だけでなく、今の私たちにとっても大切な教えです。

過ぎ越しの食事は次の様に進んでいきます。まずその食事を聖めるために、食事を用意する前に第一の杯を飲みます。そしてその後、パセリかレタスを塩水に浸して食べ、パンを裂いて食べてエジプトでのさまざまな苦しみを覚えるのです。そのときに、その集まりの中で一番若い者が「今晩どうしてこういう食事をするのか。」と質問すると、普通はその父親が、祖先がエジプトの奴隷から解放されたことを記念してだと答えた後、解放の物語を読んで聞かせるのです。それが終わると、詩篇 113～115 篇のハレルヤの詩篇を賛美します。そしてその後、第二の杯が回されて、もう一度感謝を捧げた後、種なしパンを一人一人に配って食べる。同時に苦菜を挟んだパンをハロシュと言われるフルーツのソースにつけて食べます。それはエジプトの奴隷時代に、彼らが作らなければならなかったレンガを思い起こさせるのです。その後、焼いた羊を食べ、この食事が大体終わりかけたころ、この家の主人は人々に残りのパンを配ります。

14 章の 22 節はちょうどそのあたりで、メインディッシュも終わり、イエスがパンを裂き、祝福して後、彼らに与えて、「取りなさい。これは私の体です。」と言われます。その後、感謝の祈りを捧げて第三の杯が配られます。そのときにイエス様は、「これは私の血である。」とお話になります。普通はこの後、詩篇の 117 篇のハレルヤの賛美が歌われて、第四の杯を飲んで、詩篇の 136 篇を歌い、祈りを捧げて食事が終わるのです。

イエス様はここでイエス・キリストご自身の死を人々に教えられたのです。「これは私の体です。」と言われたのは、パンがイエス・キリストの体に変わったという話をしているのではなく、あくまでも象徴の話です。「この杯は私の血です。」と言った時に、このぶどう酒が急に血に変わったのではない。これはイエス・キリストの血、命を象徴したのです。

これは、聖餐式という形で今も守られています。イエス様がそのことを命ぜられたからです。イエス様はここで、我々が神様に対して忠実に歩んで行くために忘れてはならない大切な 4 つのことを教えようとされています。

A. いつでもイエス様の十字架を覚え続けなさい。

この食事を用いて、その十字架がどんなに人々にとって、今の私たちにとって意義深いものであるのかを教えておられます。イエス様はこの十字架のすばらしさを 4 つあらわしておられます。

(1) 契約

14 章 24 節に「契約」という言葉が出てきます。ヘブル人の手紙の 8 章 6 節，7 節にも「契約」が出てきます。契約には、最初の契約と新しい契約があります。古い契約というのは、モーセの契約です。しかし、モーセの契約によっては、人は神様と正しい関係に入れられることはないのです。モーセは律法という形でさまざまな教えを人々に与えましたが、モーセの契約にはそれを忠実に守れば神様は祝してくれるし、守らなければそこには呪いがあるという条件がついていました。神様はみんなを呪って、滅ぼそうとされていたのではなく、私たちには神の憐れみが必要だ、救いが必要だということを知らしめるために、本当の我々を悟らせようとされたのです。

しかし、イエス・キリストは、完全な契約を人々に与えることがおできになる方です。この古い契約を結んだ時も、モーセは血を取って民に注ぎかけ、「契約の血」だと言いました。そして、イエス様によって説かれた新しい契約も完全な血によって、完全に成立する契約です。今までの契約では人間を完全に罪から救い出すことはできなかった。しかし、今度の新しい契約によって、私たちは正しい神様との関係を持つことができるようになったのです。
この「契約」という言葉は同等のもの同士が結ぶ同意ではないということを頭に入れておかないといけません。これは一方的に備えられたものです。だから、それに対する我々の選択は、受け入れるか拒むかです。つまり神様と和解して神様との契約を結ぶのか、それとも神様に逆らい続けて神の呪いをいただくのかのどちらかです。私たちはこのイエス・キリストの救いを受け入れる時に、神様と和解できるのです。我々がイエス・キリストの十字架を見上げる時、この完全ないけにえの命が捧げられたことによって、イエスを信じる者に神様は契約を結んでくださるというのです。
(2) 全人類のためであった。
マルコの 14 章 24 節に「多くの人のために」とあります。ルカの福音書やコリント第一の手紙 11 章を見ると、「あなた方のために」と記されています。つまりイエス・キリストは、時代を越えて、人種を越えて、国籍を越えて、すべての人間のために十字架で死んでくださったのです。
(3)　イエス様の死は自発的なもの。
24 節に「流されるものです。」と記されています。この「流す」という言葉を辞書で見ると、殺されることによって血を流すという意味があります。イエス・キリストは大変な苦しみにあって、人々から殺されて血を流すことを教えるものです。同時にこの「流す」という言葉は、キリストが自発的に命を捧げることをも意味しているのです。ローマの兵隊がイエスの命を奪ったのではないのです。人々はいつイエスを殺そうかと、いろんな策略を練りました。しかし、すべての事は神様の計画のもとに行われてきたのです。あなたを愛しているから、あなたのためにイエス様は自分の命を喜んで捨ててくださったということをこの言葉は教えています。
(3) イエス様の死は罪よりの解放をもたらす。
エジプトにイスラエルの民がいた時、神様は、このエジプトの地のすべての初子を殺す、しかしその家の門柱とかもいにいけにえの血が塗られていたら、私はその家を過ぎ越すと約束されました。そこからこの過ぎ越しの祭りという言葉が出てきているわけです。過ぎ越しの祭りをするたびに、彼らはそのことを思い出したのです。神様は彼らを奴隷から解放してくださった。そして、このイエス・キリストの十字架によって、神様は私たちを罪の奴隷から救い出してくださったのです。
イエス様がペテロとヨハネとヤコブを連れて高い山に登られた山上の変貌という出来事で、モーセとエリヤがあらわれてイエス・キリストとイエス様のご最期について話し合われます。(ルカ 9 章 31 節)「ご最期」というのはギリシャ語では「エクソドン」という出発とか脱出とか死を意味する言葉です。旧約聖書の出エジプト記というのは、英語で「エクソデス」です。つまりイエス様がモーセとエリヤと話し合っていた内容は、イエス・キリストの十字架によって、人々がその罪から脱出することができる、罪から解放されるということです。十字架はすばらしいものです。あの十字架がなければ、私たちのすべての信仰は空しいのです。我々があの十字架を見上げる時に、そこにすばらしい神様の愛を見るのです。

だから、あなたが常に忠実な歩みをなすための秘訣の 1 つ目として、イエス様は十字架をいつも覚えていなさいと教えておられます。しかし、すぐに我々はそのことを忘れるのです。だから私たちがそのことを忘れないために、その後、神の命令に従って教会は聖餐式を守り続けているのです。私たちは聖餐式を迎えるたびに、また聖餐式を迎えなくても、いつでもイエスを覚えることが必要なのです。この「覚える」という言葉は、ユダヤ人にとっては、イエス様が経験なさったその苦しみを自分も経験するという意味です。我々が十字架を覚える時に、神様が望んでいるような覚え方をするかどうかです。どれほどの苦しみをイエス様があの上で味わっていらっしゃるのか、そして何よりも父なる神様から引き離されたその悲しみがいかほどのものであったのか、私たちはよくわかっていない。
また「これを行いなさい。」とおっしゃった。聖餐式は、私たちの教会では月に 1 回と決めました。あるところでは毎週するし、毎食するところもあったようです。神様は何回とは書いていない。しかし、神様が望んでいらっしゃるのは、この聖餐式を守ることによって、しっかりと私たちが十字架に目をとめるようになることです。こうして私たちの目がすべて十字架に注がれることがなければ、すぐに私たちは十字架のことを忘れてしまいます。我々の日々においてもしっかりと十字架を見上げて、歩み続けていきたいものです。

B. 自らの責任を考えなさい。(1 コリント 11 章 26 節)

神様はあなたにすばらしい救いをくださった。神様はあなたと和解してくださった。だから、和解された私たちは大切な責任を負っていることを忘れてはならないというのです。パウロはあなたの責任は主の死を告げ知らせることだ、この救いのメッセージを伝え続けていくことだと明確に教えています。これは教会の誰かある特定の人々の働きではなく、救いに預かった私たち一人一人が神様から望まれていることです。
あなたはそのことを覚えながら日々歩んでいらっしゃいますか？私たちは言葉をもって大胆に語ることが必要です。信仰は聞くことから始まるのです。語る人がなくてどうして聞くことができるでしょう。そのことを十字架を見上げるたびに、聖餐式につくたびにしっかりと覚えなさいとパウロは私たちに教えてくれます。

C. 自らの信仰の歩みを吟味しなさい。(1 コリント 11 章 27 節～31 節)
私は忠実に歩んでいるかどうか吟味しなさいというのです。告白する罪、神様の前に隠している罪がないか。こういうことを言うと大きな罪を連想しますが、例えば今まで我々が学んできたように、一番基本的な人間関係において、もし我々がこの場にいて、誰か兄弟姉妹に対して怒りとか憎しみを持っているのなら、それは罪だということに気づかなければいけない。そうでなければ、いつまでたってもあなたは神の前に正しくならない。また私たちが聖餐式を迎える時に気をつけなければならないことは、それがただの儀式に変わってしまうことです。私たちのなすことは、神様を愛するゆえに、感謝のゆえにという正しい動機を持ってしなければいけないと教えられてきた。もしあなたがそのような罪を悔い改めないのなら、神様の懲らしめがあることを教えています。31 節に出てくる「裁き」は、神様を知らない人々に対する永遠の裁きの話ではなく、神様からの懲らしめです。それによって私たちが神様の前に立ち返ってくるように、神の前に喜ばれる歩みをなして行くために、矯正を目的とした懲らしめがあるというのです。
神は時として病を与えることもあります。時として肉体の死を与える時もあります。これは永遠の死、地獄の話をしているのではない。この死の後、その魂はキリストのもとに上がるのですが、しかし、罪を告白しないゆえに、神様はあえてこのような懲らしめをもって、あなたに大切な事を教えようとされる場合があるということを教えているのです。
あなたのうちには罪がないでしょうか。悲しいことに、この使徒たちがそうであったように、あのイスラエルの民がそうであったように、繰り返し、繰り返し我々は罪を犯し続けます。しかし、私たちがしなければならないことは、罪を犯した時に神の前にその罪を告白していくことです。罪の中を歩み続けないことです。神様は私たちにそのことを望んでおられます。

D. 自らに与えられた希望をいつも覚えること。(マルコ 14 章 25 節)
感謝を捧げて後、人々は第三の杯を飲みました。普通ならその次に第四の杯を飲むのですが、彼らは第三の杯を飲んだ後、詩篇 116～118 篇を賛美してオリーブ山へ出かけていくのです。
では第四の杯はどうなったのか――。イエス様は、神の国で新しく飲むその日までは、飲まないと言われました。ということは神の国においてその杯を飲むということです。我々に対する神様の希望をここで教えてくれているのです。この過ぎ越しの食事に預かることは祝福でした。そしてイエス様は、後にまたあなたたちはこの私のテーブルにつくのだとおっしゃいました。
私たちはいろいろな出来事の中で、今しか見えなくなって希望がなくなってくる。肉体は弱っていくし、死が近づいて来ています。しかし、第四の杯はこれから後に起こることだ。イエス・キリストがこの地上にお帰りになって千年王国を築かれる時に、私たちは主イエス・キリストにお会いして、そこでともにこの喜びの杯をいただくことができるのです。そのすばらしい祝福の中に招き入れられるのです。希望を持って生きなさいというのです。そして私たちはその希望を下さった神様を人々に証しするのです。こんなふうに生きなさいと、この食事をもってイエス様はお話になったのです。

あなたはどうなさいますか――。
主の憐れみによって、このような歩みを始めていきましょう。神様の喜ばれること、望んでいらっしゃることをなす時に、神様の栄光があらわされるからです。